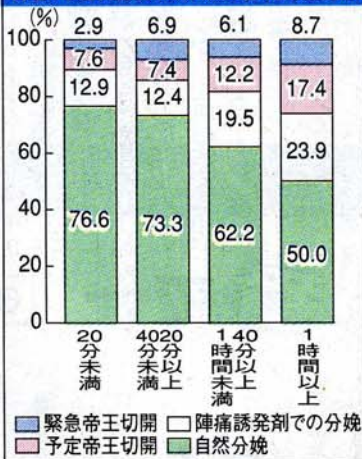


産科遠いと帝王切開増

自宅から産科施設までかかる時間と分娩方法



岡山大生 妊産婦調査

自宅から産科施設までの距離が遠いほど妊婦の不安は大きく、陣痛を待たずに帝王切開で産む割合が高い。岡山大医学部保健学科の学生が倉敷、美作など岡山県内5市の妊産婦を対象に行った調査から、こんな傾向が浮かび上がった。医師・施設不足が深刻な県北を中心に、緊急時のリスク回避のために母体への負担が大きい帝王切開が選択されている実態が垣間見える。

緊急時リスク回避か

調査で「分娩に不安あり」と答えた割合は、自宅から施設までの時間が「二十分未満」の場合で41・1%。これに対し、「一時間以上」は65・0%で、理由も「距離・時間」が35・0%とトップを占めた。施設までの時間と分娩方法の関係を見ると、「二十分未満」では陣痛を待っての自然分娩が76・6%を占めたが、「一時間

調査方法 岡山大医学部保健学科の溝口祥代さん(三三)、田上志保さん(三三)ら4年生6人が、昨年9-11月、真庭、新見、備前、美作、倉敷の5市で実施。乳児健診などの際、過去4年間に妊娠・分娩を経験した女性計570人にアンケートした。

以上)になると50%にとどまった。逆に帝王切開の割合は二十分未満の10・5%に対し、一時間以上は26・1%。このうち、あらかじめ出産日を決めて行う予定帝王切開は二十分未満で7・6%、一時間以上では17・4%に上った。

市別では、産科施設の多い倉敷市では予定帝王切開が4%なのに対し、施設の少ない県北では真庭市12・5%、美作市11・8%と高かった。「医師が少なく、近くに緊急搬送できる拠点施設もない地域では、(時間を要すると)リスクが高まる」未熟児や逆子などのケースで、事前に帝王切開を選ぼうとする意識があるのでは」と調査を指導した中塚幹也教授(母子看護学)は推測する。

“南厚北薄”顕著に

求められる地域偏在解消

自宅から産科までの距離が遠いほど帝王切開の割合が高いという今回の調査は、妊婦や産科医が抱える不安の大きさを裏返しと言える。分娩施設の少ない

地域では多くの妊婦が精神的、肉体的なリスクを強いられる格好だ。岡山県内では分娩施設約七割が岡山、倉敷市の県南に集中する。岡山理科大の関明彦教授(公衆衛生学)が厚生労働省の統計をもとに調べた岡山県内の産科施設(分娩を取り扱わない施設含む)は、一九九六年の百八十八カ所が二〇〇五年は八十三カ所に減少。減少率は岡山市の15・8%に比べ同市以外は38・4%

と大きく、「南厚北薄」が一層顕著になった。全国的には、過酷な勤務実態や医療過誤訴訟の増加などで産科医・施設不足が深刻化。岡山県は他県ほど危機的状況にはないとされる。それでも、地元で出産できない「空白地域」は美作、備前市など七十七市町村。高度な医療に対応できる「周産期母子医療センター」は県内六カ所のうち岡山、倉敷市以外は一カ所(津山市)しか整備されていない。二〇〇四年に始まった医師臨床研修制度以降、大学から地方病院への医師派遣が減り、地域偏在にも一層拍車がかかる恐れもある。「安心して子どもを産み、育てる」社会の実現には、妊婦の不安を解消していく全体的な取り組みが急がれる。(阿部光希)

解説

自宅から産科までの距離が遠いほど帝王切開の割合が高いという今回の調査は、妊婦や産科医が抱える不安の大きさを裏返しと言える。分娩施設の少ない

地域では多くの妊婦が精神的、肉体的なリスクを強いられる格好だ。岡山県内では分娩施設約七割が岡山、倉敷市の県南に集中する。岡山理科大の関明彦教授(公衆衛生学)が厚生労働省の統計をもとに調べた岡山県内の産科施設(分娩を取り扱わない施設含む)は、一九九六年の百八十八カ所が二〇〇五年は八十三カ所に減少。減少率は岡山市の15・8%に比べ同市以外は38・4%

と大きく、「南厚北薄」が一層顕著になった。全国的には、過酷な勤務実態や医療過誤訴訟の増加などで産科医・施設不足が深刻化。岡山県は他県ほど危機的状況にはないとされる。それでも、地元で出産できない「空白地域」は美作、備前市など七十七市町村。高度な医療に対応できる「周産期母子医療センター」は県内六カ所のうち岡山、倉敷市以外は一カ所(津山市)しか整備されていない。二〇〇四年に始まった医師臨床研修制度以降、大学から地方病院への医師派遣が減り、地域偏在にも一層拍車がかかる恐れもある。「安心して子どもを産み、育てる」社会の実現には、妊婦の不安を解消していく全体的な取り組みが急がれる。(阿部光希)